

東雲 (しのめ)



東中学校

NO.1

令和2年8月28日

文責:中山



職員室便りとして「東雲」を創刊します。東中学校にちなんで「東」がつく言葉として「東雲」と名付けました。「東雲」とは、ご存知の方もおられるかと思いますが、「東の空がわずかに明るくなる頃。あけがた。あかつき。あけぼの。」(広辞苑第七版)という意味になります。この通信がきっかけとなって、先生方の実践が飛躍する「夜明け」となってくれると幸いです。(ちなみに我が母校「耐久高校」校歌の出だしの言葉です。)

この通信を通して、様々な実践や教育情報を紹介できればと考えています。当面、私はありがたいことに多くの授業を見る機会が多かったことから、授業方法のあり方を中心にお伝えできればと思います。皆さんは教育の「不易と流行」という言葉をご存じですね。つい、流行に走ってしまい不易がおろそかになることで本末転倒になってしまわないようにバランスよく取り組むことを意味しています。今だとアクティブラーニングを取り入れるばかりに、基礎学力を定着できない状況に陥ることで。一時期こういう表現もありました。「言語活動は手段であって目的ではない。」つい、言語活動をすることを目指してしまい、言語活動ありきの授業になってしまって本来子供たちにつけたい力をつけることができないことを指しています。皆さんの授業は、アクティブラーニングありきになっていませんか？グループで話し合えることが授業の目的ではないことを心得て欲しいところです。

しかし、今年はコロナウイルスの影響で、このアクティブラーニングでさえ臨めない日々が続いています。皆さんも「教科書を教える授業」が精一杯ではないでしょうか？教科書の内容を一生懸命子供たちに詰め込めようとする授業ばかりだと、子供たちも息が詰まってしまいます。かといって、中身の無い「活動」ばかりでは、学力は定着しません。当面の間、若い先生も多い学校ですので、いわゆる“不易”の内容を伝えます。不易の部分が基礎にあるからこそ、流行が生きるのですから。“不易”をしっかりとマスターして、“流行”を活かした授業、「教科書で教える授業」を目指すことができればと思います。(ベテランの先生は、「こんな当たり前」と思って読み返してください。)

そこで、“不易”の内容とはどんなことかということ、代表的なものが和歌山県教委が出している『和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条』〔裏面参照〕がその一つでしょう。これが出された当時は、ある市町村教委の指導主事が「県はろくなもんつくらんけど、今回はいいもんつくった。」とお褒めの言葉をいただきました。わかりやすいので、みんながこれに取り組みやすいということで、賛同が得られたんだと思います。ただ、いくつか取り組んでいる様子を見させてもらったり、先進県の様子を見てきたりすると、本当の姿を理解できているとは言えないなあと思う場面も見られます。そこで、次回からこの3か条をベースにして、紹介していきたいと思いますので、乞うご期待ください。

・・・ to be continued ・・・